

姫路城見聞記

神崎辰雄

(会員・鶴見町大島)

私は子供の頃からなぜか城に魅かれていた。それは遠い先祖が戦国の侍大将として、城から城をまわっていたその血を受けているからかもしれない。

祿高四千五百石を投げ捨て、豊後の国に落住した戦国時代のしがらみを、各地の城に登るとき、ふと郷愁のような懐しいおもいかられるのである。

このたび、甥の結婚式で姫路を訪れる機会を得た。結婚式よりも、心は早くも天下の名城、姫路城を見物したい気持ちでいっぱいだった。

城のさまざまな表情を見つけると、そこに一時間・二時間があつという間に過ぎてしまう。

姫路城は五層六階の大大守と、三基の小天守からなる白亜の連立天守の華麗さから、白鷺城と雅称される平山城。現在の姿が整ったのは慶長十四年(一六〇九)池田輝

政の築城による。以来一度も兵火に遭うことなく、天守をはじめ諸櫓や門など、城郭の中核部が完存し、日本の城郭遺構として名高い。

城の前史は南北朝のころ、赤松貞範が小城を築き、その後山名持豊の城となるが、応仁の乱ののち、再び赤松氏が取り戻し、そして天文十四年(一五四五)赤松氏の目代で小寺氏の家老、黒田重隆に預けられている。重隆の孫がかの黒田孝高(如木)である。

天正八年(一五八〇)孝高は秀吉に姫路城を献じている。

姫路城

秀吉は孝高と浅野長政を奉行として築城の工を起し、姫山山上に三重の天守を築いた。その後、大坂城が完成すると木下家定(北政所の兄)に任せている。秀吉が逝去する直前、豊臣麾下の諸大名は誓紙を書いて呈出している。内容は



一、大閤殿下が定められた御法度、御置目（禁止条件）に違背せぬこと。

一、朋輩同士の間で意趣遺恨を含まず、企てや気候に争いあうことをせぬこと。

一、私的な徒党を組まぬこと。喧嘩口論のあつた時、肉親や友人という私的な縁故で一方的に味方せぬこと。

一、豊臣家に暇をとらぬこと、私の理由で下国せぬこと。などであつた。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは、

秀吉が目をかけ飼ひ慣らした大名でも、時の流れを覩るに優れた才のある者はうまく立ち回っている。

「忠臣二君に仕えず」とは、江戸期における武家秩序保全のための言い習わしで、戦国期に主を度々変えていたことなど、武勇にすぐれた者としてはごく普通であつたようだ。

天下の実権が家康に移ると、播磨一国五十二万石は、女婿の池田輝政に与えられた。輝政は慶長六年（一六〇一）から築城工事にかかり、九年の歳月をかけて今日に残る名城を築いた。

五層六階の大天守と、三層の小天守三基を渡櫓によって結んだ連立天守は、天守建築の白眉とされ、私もこゝ

を歩きながら「すごいなー」と感動した。

姫山に本丸と二の丸、鷲山たづまに西の丸を設け、三の丸を内堀で囲んでいる。その外周、中堀との間は侍屋敷とし、その外側外堀との間は町人町とした。

池田輝政は慶長十八年（一六一三）に没し、あとを継いだ利隆も元和二年（一六一六）京都で客死すると、池田氏は鳥取に移された。替わつて本多忠政・忠刻とく父子が姫路城に入る。忠刻の妻がかの有名な千姫である。寛永三年（一六二六）忠刻が父に先だち没すると、五年後に父忠政も急死し、本多氏は大和郡山に転封になつた。

私達が子供の頃、こんな歌が流行していた。「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振袖で」、歌の意味を祖母に聞くと千姫が吉田御殿に住んでいた頃、みめよい男が通ると御殿に招き入れていたが、最後はどうなつたのか、御殿から帰された男はなかつたそうなど、こうした伝説から生まれた歌のようである。

その後、城主は松平氏三代、榊原氏四代と次々と変わっているが、寛延元年（一七四八）酒井氏が入つて安定し、九代忠悼とく（最後の老中）のとき、幕末を迎えている。

慶応四年（一八六八）の鳥羽・伏見の戦いでは姫路藩は

幕軍に加わり、備前藩兵の攻撃を受けたが無抵抗で開城し、兵火を免れている。明治十二年、太政官布告で名古屋城とともに国内無比の名城であるとして保存の指令が出されている。昭和三十一年から三十九年にかけて天守の解体修理も完了、八棟が国宝数十棟が重要文化財に指定され、その威容が今も保たれている。

ガイドの案内で次々と登ってくる観光客、私もいつしかガイドの話に耳をかたむけていた。「主君が亡くなり、その後の千姫はどうなりましたか」と尋ねると「そこまでは勉強不足で知りません。申し訳ありません」と答えるガイドのあどけなさが、「野暮な質問をしたな」といつまでも心に残った。

秋空に白く美しい姿を見せる白鷺城、何度でも訪れてみたい城の一つである。

『表紙解説』

この不動明王は迎接庵ごうせつあんに隣接する波切不動堂の本尊である。高さは一五〇センチあり、これ程の大きさを持った仏像は、近隣の市町村では見ることができないという。眉を吊り上げて両眼を見開き、口の端に牙をむき出した忿怒の相であるが、他地域の不動明王と比較すると温ぬるやかであるという。

一方、像に施された色彩は新しく、近代になって補彩されたものであろうか、そのため何の木に彫られたか断定できないが、全体像から推測して楠と考えられている。但し、腕の部分と膝前は別の材質であるという。

仏像の胎内には天保十一年（一八四〇）庚子年と墨書しているから、これが製作年代と考えられ、全体像から推定してもそうであるとしている。

なお、像を置く岩座や火焰、それと光背等も当初のものであるという。

参考Ⅱ米水津の文化財